

2026 年 9 月 4 日(金)こころ未来高等学校三島分校

環境再生と市民協働の実践

概要

本講義は、NPO 法人グラウンドワーク三島による源兵衛川をはじめとする環境再生の実践を軸に、行動重視の環境保全、科学的根拠に基づく合意形成、市民・行政・企業の協働、そして教育・社会システムへの示唆を扱う。

講師は自身の経歴（元静岡県職員、都留文科大学教授、ネパール政府環境アドバイザー、英国グラウンドワークの導入者）とユーモアを交えた自己紹介を通じ、規則の中で自由を見出す姿勢、社会における多様な価値観、専門性とマネジメント能力の両立、現場主義の重要性を強調した。

講義後には、源兵衛川での野鳥観察会が実施され、現場観察へとつなぐ導入となった。

知識ポイント

1. 行動を通じた成果と信用（グラウンドワーク三島の意義）

- 現場で身体を動かし、成果を可視化する実践により、言葉で終わらない信用を構築。「グラウンドワーク三島は嘘をつかない」という評判・信用を得る。
- 学生との草刈り・清掃などのフィールドワークで、当初の受動性が達成感と主体性へ転換。安全最優先のミニマルな指示により自律性を引き出す。
- 渡辺氏は「考えているだけでは社会は何も変わらない」「人生を考える時間を重視」する教育哲学を提示、現場学・実践学を必修化。

2. 三島の水環境と源兵衛川再生

- 三島は富士山の豊富な湧水に支えられた「水の都」。しかし高度経済成長期の上流域での大規模な地下水汲み上げにより湧水が減少。

- 三島市・清水町・沼津市は、黄瀬川地下水規制条例を制定する一方、長泉町からの上流部地域では無規制の問題が残る。
- 源兵衛川の暗渠化に反対し、1992年にグラウンドワーク三島を立ち上げ、約10年かけて現場の清掃・草刈り・将来像の議論から再生を実現。汚水を「隠す」発想から、自然を「取り戻す」発想へ転換。
- 年間約800万人の観光客が訪れる三島で、約350万人が源兵衛川に訪れるまでに回復。夏場は1日に1000～1500人の親子連れが利用する無料の日常的な水辺公共空間に発展。

3. 科学的根拠に基づく保全・合意形成

- 市内約580ヶ所の井戸・湧水を3年かけて調査・GPS化。水温・水質・pH・電気伝導度等を継続測定し、開発リスクを可視化。
- 小規模河川で日本で最初に約3000万円を投じた、自然環境調査・アセスメント調査を実施。もともとの生態（魚・トンボ等）を把握し、自然を壊さない工法を採用。
- ホタル個体数を約2ヶ月半毎日計測（2022年で約3200匹、以前の1232匹から大幅増）。データに基づく経年評価で活動正当性を担保。
- 科学データを用いて3件のマンション計画を撤回させるなど、専門性を社会に還元する実績を構築。

4. 協働モデルと英国グラウンドワークの導入

- 行政・企業・市民の対立や不信をコーディネーションで一体化。英国グラウンドワーク（1981年創設、1984年制度化）の社会システムを日本で最初に三島に導入。
- 三島での34年間の活動で34の受賞、約24億円の資金調達、グッドデザイン賞でも高評価を獲得。長期的な市民協働の成果を示す。
- 「下から上へ」のボトムアップを基本理念とし、現場の気づきを合意形成へつなげる環境マネジメントを実践。

5. 現場の小さな行動と継続の力

- ゴミ拾いなど無理のない小さな行動の継続を奨励。孤独と逆風（「拾ってくれるから」と捨てる心理）に耐え、微細な改善を積み重ねる。

- 市民の声（例：車椅子利用者の視界問題）に即応し、デッキ設置等の改善を迅速に実行。「すぐやる」文化で信頼を獲得。
- 放置竹林の伐採・チップ化・植林で3年間で森を再生。土地の取得・保全（雷井戸隣地、巨木の森等）や境川・清住緑地の公有地化交渉（3年間46回）を実現。

6. 教育・社会システムへの示唆

- 台湾でのマネジメント教育経験から、日本は専門偏重で実践的マネジメントが不足と指摘。横断的に「横串を刺す」力の重要性を強調。
- 英国やドイツの制度（農地最低所得保証等）を参照し、日本の耕作放棄地・食料安保の脆弱性を批判。制度学習と導入を提唱。
- ネパールでの環境アドバイザー経験から、リスク認識と未対策のギャップを指摘し、先取りの予防行動を訴える。
- AI活用や教育の方向性に対する国際比較を踏まえ、自ら考え、事実確認し、行動する学びを促す。

7. 学生・市民参加の実践と今後の展望

- 2026年9月3日に都留分科大学生が源兵衛川で草刈り活動を実施、達成感と現場学を体得。
- 「御殿川」を整備し、川中歩行と周遊性向上を目指す計画を構想。観光・日常利用の両立を図る。
- 講師は自身の著書やAIチャットボット（約1億字の知識搭載）を紹介し、相談・学びの窓口を提供。的確な外部アドバイザーの重要性を説く。

課題

- 配布資料の二次元コードからAIチャットボットにアクセスし、質問を行う。
- 専門性を磨き、地域の水・環境保全への還元方法を検討・実践する。
- 知識の蓄積に留まらず、現場で行動し、データを収集・検証する姿勢を継続する。